

今井のオリジナルだるま

各種だるまとも、様々な色・形を取り揃えております



福入だるま

(カラー全8色)

名入だるま(紅白)

夫婦だるま(紅白)

寿(祝)だるま

(紅白)

必勝だるま(紅)

合格だるま(紅白)

号数	高さ	号数	高さ	号数	高さ
1号	9 cm	8号	28 cm	15号	50 cm
2号	12 cm	9号	29 cm	16号	58 cm
3号	15 cm	10号	30 cm	17号	62 cm
4号	17 cm	11号	32 cm	18号	75 cm
5号	20 cm	12号	39 cm	※号数表は昭和63年度に改定されたものです。	
6号	23 cm	13号	43 cm		
7号	26 cm	14号	45 cm		

江戸時代より受け継がれてきた 今井だるまの技と祈り

福だるま、縁起だるまとして広く親しまれている高崎だるまは、上州の山々から吹き下ろす空っ風と穏やかな陽射しのもと、長時間乾燥され、あてやかな色と艶をはなちます。

高崎だるまが縁起だるまと言われるゆえんは、その目に特徴があります。両の目をくり抜いた目無しだるまは、願をかけて片方の目に墨を入れ、満願成就のあかつきにもう一方の目を開眼させるという習わしにもとづいています。

昔からの製法技術を今もそのまま守り続けている今井のだるまは、数あるだるまの中でも、ひときわ勇ましい姿が目を引きまします。赤い隈と金泥で縁取られた目はこの世をキッと見定め、鶴と亀を模した立派な眉と髭をたたえた顔は、悪を退散させる厳しさを漂わせています。

すべての行程を全くの手作業で仕上げていく今井のだるまは、ひとつひとつがオリジナル。職人の手のぬくもりがじかに感じられる逸品です。

現在 制作風景



昭和初期 制作風景



いつまでも変わらない
手のぬくもり



達磨大師の教え

禅宗の初祖達磨大師は、面壁九年の末仏の悟りを得、その教えは代々弟子たちに受け継がれ、中国大陸に広まり、さらに日本にも伝えられました。

また、達磨は「転んだら起き上がって、また一からはじめよ」とも教えています。七転八起といわれるように、失敗してもいい経験・・・と自分の力を信じて、コツコツと努力していくことにより、心願成就、目標は達成される、人間の限りない偉大な力を教えたことが、今日だるまが尊重されているゆえんです。

高崎だるまの始まり

少林山達磨寺は、延宝五年(1667)小さな草堂のあったこの地に、帰化僧の東皐心越禅師が、徳川光圀公の帰依により開山したとされます。そして、毎年正月の配り札としていたのが、心越禅師の描いた一筆達磨の座禅像。その後文化年間、配り札にヒントを得、九代目住職の東獄和尚が型を彫り上豊岡の山県朋五郎に和紙を張って作らせたのが、高崎だるまの始まりとされています。養蚕業が盛んになった明治には、豊蚕を祈るためにも求められ、近年では商売繁昌を祈念する商家筋には欠かせないものとなっています。

高崎少林山だるま市

高崎市鼻高町にある少林山達磨寺のだるま市は、同山七草の縁日に本堂前で掛声勇ましく売り出されたのが始まりとされています。毎年正月六日の夜から七日にかけての少林山七草星祭のだるま市は関東一をほこり、境内に軒をならべただるま屋は、「拾万円、百万円、千万円(拾円、百円、千円)」と景気のよい声をはり上げ、参拝者は大小様々のだるまを手にしでいきます。その日同山の参拝者は50万以上に及び、山頂の本堂前まで続く、だるま屋の灯の帯は、高崎の正月のクライマックスを彩ります。



昭和初期



現在